

お伽草子の冒頭語

——内容分類との関わり

染 谷 裕 子

一、はじめに

古典文学作品の冒頭表現は、しばしば暗記させられるほどに印象的で、個性的な名文が多い。それだけに、その作者が表現に対して熟考を重ねたことが想像できよう。一方、冒頭語に型があるものがある。たとえば、ある種の物語や、説話集の各説話において、その冒頭を「昔」で始める。これは、冒頭表現に全く意識しなかったかという、そうでもない。ある型を使うことによって、それはそれで作者の意図がある場合もあるのである。

ところで、この「冒頭表現」という語を使用する場合、注意すべきことがある。「冒頭」という範囲をどこまで言うかという点である。時に、ある作品の最初の一句、または一文、またはその後に続くいくつかの文を含めたひとまとまりの文章をも指す。さらに、たとえば文学研究においては、主題を暗示した重要な箇所として、かなり長い範囲を指す場合もある。

鈴木一男氏は、「起筆」と「冒頭」という語を使って「起筆は冒頭に含まれるが、冒頭そのものではなく、いささか異なる役割をになうものと考える。ふつう、あまり区別をおかず、同義語のように解しているために、しばしば物語の冒頭との類似や相違を説くときに曖昧やくいちがいを生じている」という問題を提示されている。^(注1)そして、「起筆」とは

「書き起こしの最初の一句」であり、「作者も読者もそこに生活している混沌のうつつ世から、けざやかに一線を画す作中世界設定の最初の一太刀であり、現実から作中世界に誘い入れる、あるいは作中世界と現実とを切り離す役割を主とする」という。一方「冒頭」とは「その作品の全内容にかかわり、作風を決定する全編の発端のこと」であり、「これから描出しようとする全編の内容を暗示し、作風を端的に印象づけ、作品全体の構成に参与するもの」であるとする。

従って、「今は昔」や「それ」など、一般に「冒頭語」などと呼ぶものは、鈴木氏の考えに従えば「起筆」にあたることになる。

さて、本稿ではお伽草子の冒頭語をとりあげる。これは、鈴木氏の言われる「起筆」にあたる。ここでお伽草子と呼ぶのは、室町物語や中世小説などと呼ばれる数百編の短編の作品を指すが、これらの作品は、前代の様々なジャンルの影響を受けて成立したものである。そして、それらは内容的に分類が試みられ、その分類方法は様々であるが、現在最も一般的に行われている分類は、市古貞次氏の「公家物」「宗教物」「武家物」「庶民物」「異国物」「異類物」の六分類である。^(注2)これは主としてその舞台や主人公からなされたものであるが、その影響を受けたジャンルとも関わる分類でもあり、複雑な内容を持つ作品の場合、どこに入れるか迷うこともある一方で、大枠をつかむ上ではなかなか有効な分類であると思われる。本稿では、この内容的な分類と冒頭語がどう関わるかということを考えてみたい。この冒頭語は内容的な分類をかなりの程度反映しつつ、一方で、たとえば、「公家物」に分類される作品であるのに、「宗教物」に多い冒頭語を用いるなど、その分類から漏れ出る作品や伝本があることが予想される。それが何を意味するのかということについても考えてみたい。さらに、たいへん無謀な試みであるが、内容による分類とは異なる次元で、冒頭語による分類が果たして可能なのかという点について考えていきたい。

二、御伽草子の冒頭語の調査——冒頭語ベスト10

『室町時代物語大成』十五卷（角川書店）に掲載される四百八十作品の冒頭語を調査し、その偏りについて考察する。『室町時代物語大成』（以下『大成』と呼ぶ）には前代物語または近世小説に含めた方がよさそうな作品も掲載されている。

また、同じ作品の異なる伝本が複数掲載されている。が、今これらをすべて省くことなく一括して冒頭語について調査することにする。結果について、これらの点が何らかの影響を及ぼすかどうか吟味していくことにする。なお、お伽草子の用例をあげる際には『大成』の作品番号、アルファベットで市古分類、^(注3)作品名を記す。

さて、『大成』には四百八十本が掲載されるが、そのうち二十六本は冒頭を欠く。これらを除いて、冒頭の語を単純に調査すると、よく使われる十のパターンが浮かび上がる。

この結果を示したのが次頁の図Ⅰおよび表Ⅰである。

この十のパターンについて、まず説明することにする。

(1) むかし

全体として最も多い冒頭語である。昔話の冒頭語であり、また古来、物語や説話にもっともよく見る冒頭語である。

藤井貞和氏によれば、「むかし」は『万葉集』や『風土記』の民間伝承（に關わる説話）を語る時に冠する語であり、上代には「短編的に、独立的に」^(注5)「むかし…」から始める説話が大に行われていた」という。この「むかし」は、三谷栄一氏などの指摘もあるように、^(注5)物語文学においては『源氏物語』以前の物語に多く見られる冒頭語であり、『源氏』以降（鎌倉時代の擬古物語までは）その形を変えていく。

ここで注意すべきは、二つある。一つは、柳田國男氏の指摘する昔話の典型「むかしあるところに」の^(注6)パターンが半数近く占めている(32/79)点である。

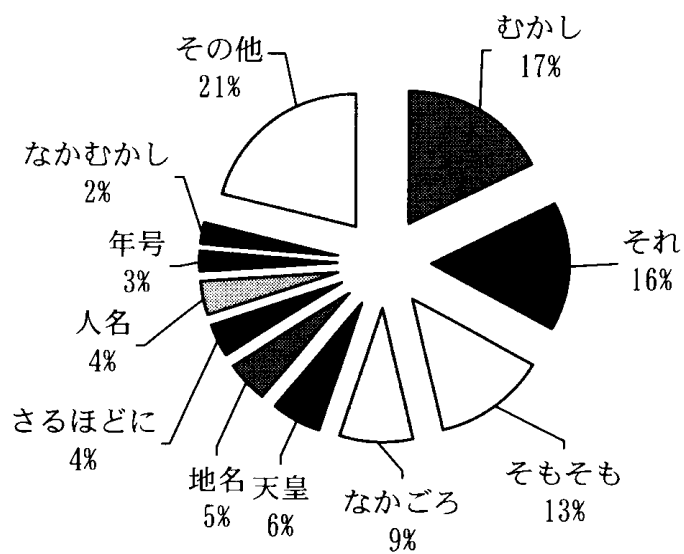
◇むかし、かゝの國、いまつと申所に、うとくの人、おはしける (239a 千手女物語)

◇むかし、てんちくに國あり (329b びしゃもん)

◇むかし、かまぐらのきんなひに、山くちのあきひろと申人あり (016c あきみち)

◇むかし、九てうあたりに、ひき人と申、おとこ、おはしける (145d 小男の草子)

◇むかし、中天ぢく、まかだこくのみやこに、おようのあまとて、一人の長じや、おはします (366e 宝月童子)



図I お伽草子の冒頭語

表I お伽草子の冒頭語

	公家物	宗教物	武家物	庶民物	異国物	異類物	その他	全体
むかし	24	18	9	12	10	6	0	79
それ	3	31	16	9	3	7	2	71
そもそも	8	32	11	1	5	3	0	60
なかごろ	16	9	3	5	0	6	1	40
天皇	9	2	13	0	2	0	0	26
地名	1	11	5	2	1	3	0	23
さるほどに	0	1	14	1	0	2	0	18
人名	6	6	5	0	0	1	0	18
年号	1	3	2	0	1	5	0	12
なかむかし	6	1	0	1	0	3	0	11
その他	17	28	4	7	5	33	2	96
集計	91	142	82	38	27	69	5	454

◇むかし、なんてんちくのさかひに、しゅうと申人有(323fはまぐり)

もう一つは、「むかし」という時の限定をしながら、さらに時の表現を重ねる例が少なからず見えることである(26/79)。これは、一度大きく時をとらえ、さらに細かく説明する表現方法と見ればよいのだろうが、後続する時の表現に、天皇の御代を記す場合が多い点にも注意すべきであろう。

◇むかし、にんめい天わうの御とき。(002a 青葉の笛)

◇むかし、ならの御門の御とき、なひ大じん、ふちはらのみつともとて、世には又なき人、おはしけり(140a 興福寺の由来物語)

◇昔、村上天皇御宇、康保三季春之比、大唐ヨリ是害坊ト申大天狗ノ首頂、日本へ来レリ(231b 是害房絵)

◇むかし、さかの天わうの御時、くきやう、一人、おはします(325c はもち)

◇むかし、ふちはらの天わうの御時に、えんの行者といふ人ありけり(070d 役の行者)

一方で「むかし」がすでに形式化していると解釈することもできる。中野幸一氏によれば、『古本説話集』の冒頭はすべて「今は昔」であるが、ごく新しい説話にもこの「今は昔」が冠されており、説話冒頭の常套句を形式的に冠したにすぎないとし、他の説話にもこのような点が見えるという。^(注7)「むかし」の後に、天皇の御代以外に、「なかごろ」と続く場合も見えるが、次のような例を見ると、確かに「むかし」とはいつなのか、というような矛盾した表現も見える。

◇むかし、なかころの、ことにやありけん、都にくるまそうと申、ほつしんしやの有ける(123a くるま僧)

◇むかしにはあらず、中ころの事にやありけん、あせつの大なこんと申人、おはしけり(025a 雨やどり)

なお、この「むかし」の類に「昔より今に至るまで」も含めてある。渋川版「文正草子」の冒頭句として有名なもので、祝儀物の類にこの影響かと思われる冒頭がいくつか見える。(2)で述べる「それ」の後に続くものもある。

◇むかしより、いまにいたるまで、めてたき事を、きゝつたふるに(355d 文正草子)(356d 文正の草子)(358d ぶんしやう)

◇むかしよりいまに、いたるまで、めてたき事を、きゝたるなかに(357d 文正草子)

◇むかしより今の世に、いたるまで、めてたき事を、きつとふるに (476d ぶんしやうさうし)

◇むかしか今にいたるまで、めてたき事に、いひつたへ侍るは、かの不老ふ死の薬に、まさる物はなし (354e 不老不死)

◇むかしかいまに、いたるまで、めてたきためしに、いひつたへ侍る事、かすくおほき、其中に (371e 蓬萊物語)
 ◇それ、むかしか今にいたるまで、めてたきためしと、する事は、さまくおほき、そのなかに (379d 松ヶ枝姫物語)
 ◇それ、むかしか今に、いたるまで、めてたきためしと、することは、さまくおほき、その中に (419d 相生の松)
 ところで、「文正草子」の多くの伝本が一文字程度の若干の違いこそあれ「昔より今に至るまで」を採るのに対して、「むかし」で始まる次の伝本 (大阪天満宮蔵) がある。『大成』(補遺二) の解説では「数多い諸本の中で、他に同系の本文を見ない」とあり、江戸前期の写本という。

◇むかし、ひたちのくに、かしまの大みやうしんのねきに、大くうしと申人あり (475d 文正草子)

実は、「むかし」以外にも (10) で述べる「なかむかし」で始まる伝本もある。

◇中むかしの事にてやありけん、ひたちの國、かしまの大明神のかんぬし、大くしと申人、長者にておはします (359d 文正草子)

お伽草子としては、右の二本の始まり方のほうが普通である。これらの伝本そのものではないにしろ、こうした冒頭語を持つ「原文正草子」なるものが「昔より今に至るまで」型で始まる伝本以前に存在していた可能性を思わせる。

なお、「昔」と共に論じられることの多い「今は昔」などは「その他」に含め、ここには含めていない。数は少ないが、「今は昔」や「いにしへ」で始まる冒頭も「むかし」に類するものと考えてよいかもしれない。

◇いまはむかし、あふみのくに、ある山さとにすみ侍る翁、花しつめの、まつりやくにのほりて、ことはてぬれは、國へくたり侍るみちに (348f 藤ぶくろ)

◇いにしへ、すへらきの、かしこき御代に、あめか下のまつりこと、とりおこなはせ給ふ、左大臣殿の御子に、きんたち二人、おはします (450a しぐれ)

(2) それ

二番目に多い冒頭語が「それ(夫)」である。「それおもんみれば(夫以)」もここに含める。「むかし」と異なり、昔話や物語、説話の語り始めに、「それ」を用いることはまずない。が、説話において、序文で「それ」を用いることはある。そして、その序文は漢文体もしくはそれに近い文体で書かれている。

◇夫著聞集者、宇縣亞相巧語之遺類、江家都督清談之餘波也。(古今著聞集・序)

作品の序文は、各説話の冒頭と異なり、その作品の意図や成立事情などを述べた箇所であり、作者や編者の意識が反映される。

「それ」は本来漢文訓読系の接続詞として用いられた語で、説経や法語では、典型的な冒頭語の一つとして用いる。山本真吾氏によれば、築島裕博士蔵『表白集』(自證房覚印)に見える表白文の冒頭語に「夫」や「夫以」を用いるものが少なからず見えるという。^(注9) また、源信の「横川法語」など仮名法語の冒頭語としても用いる。

◇夫一切衆生三惡道をのがれて、人間に生る事、大なるよろこびなり。(源信・横川法語)

◇夫、一切衆生の尊敬すべき者三あり。(日蓮・開目抄)

以上のことから、「それ」は、語り手や書き手の高ぶる意識が反映された、かなり強い調子を含み持つ冒頭語であることに注意すべきであろう。

『ロドリゲス大文典』(土井忠生氏訳)によれば、「それ」は「そもそも」と同様に「冒頭または話の発端」の語であり(301p)、「内典」(『日本の宗門の書物』で文首に用いるものとして、「そもそも」「しかれば」等いくつかの語を並立し、「それ」をその筆頭にあげている。この記述は、先の序文や法語の冒頭にみられる情況と大体一致しているとみてよい。お伽草子において、「それ」で始まる作品は、発心遁世譚や本地物、縁起物などの「宗教物」に多いが(30/71)、他の分類でも少なからず見える。一見して「それ日本我が朝は…」などで始まるものが目に付く。

◇それわがてうは。しゅみの、なんせんぶしう、ゑんぶだいの國なれば、(037b 石山物語)

◇夫我朝は、ぞくさんへんちの小國なりと申せども、大國にまさりて(045c 伊吹山酒典童子)

◇夫我朝は、神代よりはしまり、神武天皇よりこのかた、國土の万民、みな此末につゞけり (247c 七夕本地)
 そういえば、『曾我物語』の冒頭も次のごとくである。

◇それ、日域秋津島は、これ、國常立尊より事おこり、土・沙土、男神・女神をはじめとして、伊弉諾・伊弉冉尊
 まで、以上天神七代にてわたらせ給ひき。(曾我物語)

「それ」は物事の由来を説き起す時に用いる語でもある。これは(3)の「そもそも」についても言える。塚崎進氏は『古事記』や中世伝承文学に共通する、帝王日嗣風の系図から始まる形式が、「昔」や「今は昔」で始まる物語の形式と対立して存在したとするが、^(注10)「それ」は「そもそも」と同様、前者の形式の冒頭語としての役割を果たしていたといってもよい。

ところで、(少なくともお伽草子において)「それ」には「そもそも」と異なる大きな特色がある。「それ」の直後に、作品のテーマに関わる一文が記されることが多いという点である。少なくとも、由来を述べる場合とはかなり異なることが以下の例からわかる。このような例は、「そもそも」にはきわめて少ない。

◇それ人けんの、あたる事を、おもふに、ういてんへんの世のならひとて、よきはおとろへ、又、あしきはさか
 ふる事もあり (321a 花世の姫)

◇それ、こかひとふこと、たいせつなり (086b 戒言)

◇それ、一しやうは、夢のうちのゆめ、たれか、はくねんのよはひを、たもたん、はんしはみなむなし、いつれか、
 しやうちうの、おもひをなさん (427c いそやき)

◇それ人として、世にすむものは、たかきも、いやしきも、じひのころを、むねとして (058d 梅津の長者)

◇それ、國をおさむる大將は、文武の両道、一つもかけては、其國をたやかならず (143d こえつ)

◇それ、烏鳥、林にさはく声、すなはち是、広長舌、鷺□、汀にたつ色、あに清浄身にあらすや (033f 鴉鷺物語)

「それ」は「序文」の冒頭語としての性格が強いのである。一方、中には次の例のように、わざわざ「それ」を付けなくてもよさそうな場合がある。単なる発語としての「それ」とでもいうべきか。但し、「そもそも」と比べると、この

ような「それ」は少ない。

◇夫、大室元年、庚申の歳。日本に、いろ／＼の病、はやりて、諸人のなやむ事、かきりなし（137b 庚申縁起）

◇それ、てんぢくまかだこくの。ほうまんちやうじやといふ人あり。（368e 宝満長者）

以上のことから、「それ」は「そもそも」に比べ、作者の意識が強い冒頭語であることを指摘しておく。

(3) そもそも

第三番目に多いのが「そもそも」である。漢字表記「抑」と記す場合も含める。^(注1) 物語や説話の冒頭語として見ることはないように思う。『日葡辞書』（岩波書店『邦訳日葡辞書』）によれば「somosomo」は「すなわち、さてまた。その上に、または従って。また、ある書物の初めとか、ある事項の最初とかを言い起こすのに用いられる語」とある。『ロドリゲス大文典』には「Sore」と同様「内典」の文首に用いるものと記され、さらに「発端の挨拶に次いで、直に書状の内容を次の語で書き出す」として「よって」「そもそも」「然れば」を掲げる（697p）。なお「Somosomo」については「sate mataの意」と注記がある。

お伽草子では「それ」と同様、「宗教物」に多く（32/60）、「そもそも」で始め、神仏や人間、物事の由来を述べることが多い。また、由来というより、人物や物事ついて、本題に入る前の大ざっぱな紹介といった方がよい例も少なくない。この点は、(2)で述べたように「それ」ほどに口調が強くない「そもそも」の性格が関わるかと思われる。

◇そも／＼、あみたによらいの、しやうかく、ならせ給ひしゆらひを、くわしく、たつぬるに（026b あみだの本地物語）

◇抑、いつくしま大神と、申奉るは（040b 厳島の本地）

◇そも／＼、かうや山と申は、ていしやうをさつて、地ひやくり、きやうりをはなれて（142b 高野物語）

◇抑^{そもそも}日本あきつしまは、くにとこだちのみことよりはじめ、てんじん七だい、ぢじん五だいのあひだを、八百まんたびと、しるさるゝ、このゆへに、やをよろづよの、かみとは申なり（298c 常盤物語）

◇抑、恵心僧都ト申者、日本第一之学生、道心者也（066b 恵心僧都）

◇そもく、この、けんさんみ、よりまさのきやうは（030c あやめのまへ）

また、(2)「それ」でもふれたように、「そもそも」はこの語がなくてもよいような、単なる発語として用いる場合が多い（25/60）。

◇そもく、かゝのくに、いまつと申ところに、うとくの人あり（237a 千じゅ女）

◇そもく、てんちくに、くにあり、そのなをまかたこくといふ（118b 熊野の本地）

◇そもく、さがの天わうの御とき。二ゐの大なごん、もちとをのきやうと申人、おはしけるが。ていわうの、ひめみやの御かたへ。しのびくくに、かよひしとがにより。つくし、ひうがのくにへ、ながされ給ふ。（472c はもち中将）

◇そもく、ころは正ち三年卯月三日、たつのこくに、よりいゑの、こうのとの、わたのへいたたねなをめして、おほせけるやうは（346e 富士の人穴の草子）

◇そもく、中比の事なるに。ちやのゆの、くわひの、はやりとび。おんごくにいたるまで。此みちをしらざるを。でんぶやじんと、なづけて。人の数には入さりけり。（202f 酒茶論）

(4) なかごろ

四番目は、時の表現「なかごろ」で始まる作品群である。『発心集』や『撰集抄』などの説話の冒頭語であり、『保元物語』や擬古物語の『夢の通ひ路物語』の冒頭語でもあるが、平安時代の物語や、その系統を引く物語にはほとんど見えないといってよい。『日葡辞書』によれば「Nacagoro」とは「一年の場合でも、一月の場合でも、その初めや終わりに対して、中間の時期を言う」とあるが、ここでは「そう遠くない昔」の意で、特に平安時代を指す場合が圧倒的に多い。志村有弘氏によれば、『発心集』でいう「中比」とは、「大体九〇〇年代後半から（それも一〇〇〇年に近い）一一〇〇年代のごく初期までのことを指す」という。^(注12) また、三谷栄一氏はお伽草子に平安時代を表す「なかごろ」や「なかむか

し」が冒頭に現れる点は注意すべきであるとし「それだけに一面では説話といった気分を濃厚にして来たことを意味する。併し一方、かかる巻頭を生ぜしめたのは平安時代の文化のあこがれ、追慕を大きく見なければならぬ」と指摘する。^(注13)

ほとんど(39/40)が「なかごろ」と副詞的に続くか、「なかごろのことにや(ありけん)」の形である。

◇中比、みやこに、さこんの中將、たいらのかねみつと申人おはしけり (024a あま物語)

◇中ころ、ていろうましましき (110b 貴船の物語)

◇中比、けんれいもんるんのちやうに、かるも、かるかや、よこふへとて、三人のわらはあり (406c 横笛草子)

◇中ころ、都あいなんじのほとりに、やんことなき尼公ひとり、すみ給ひける (039d 一尼公さうし)

◇中ころ、あふみの國、しからきといふところに、むらくもと申人、侍りき (393f むらくも)

◇中比の事にや、侍りけん、花のみやこに、左大しん、ともあきらと、申せし人、おはしけり (185a しぐれ)

◇なかころの事にや、ありけん、たつとき、せんそう、一にんおはしましける (122b 車僧絵巻)

◇中ころの事にや、けんれい門院の御時、かるも、よこふゑとて、二人の女ほう、侍りける (408c 横笛滝口の草子)

◇中ころのことにやありけん、むめつのさと、いふところに、すみたまひける、たみありけり (057d 梅津乃長者)

◇中比の事にやありけん。みやこちかきあたりに。こてふといへる人あり。 (317f 花つくし)

なお、三谷栄一氏によれば、『源氏』以後の物語では、「むかし」を冒頭語とすることがほとんどなくなり、『夜の寝覚』

や『狭衣物語』のような個性的な冒頭が生まれ、鎌倉時代の擬古物語にもそれが受け継がれていくという。^(注14) その中で、

「昔」や「中ごろ」でなく今の物語であることを強調する「その頃」^(注15)「この頃」といった冒頭語が、これは『源氏』の

「橋姫」などの冒頭語でもあったが、一部の擬古物語に見えてくる。お伽草子では、擬古物語系の二本の冒頭語が「そ

の頃」をとる。これらはお伽草子というより、前代の物語として扱われることが多い作品である。お伽草子には擬古物

語系作品も多数存在するが、その冒頭に『源氏』以降後期物語の冒頭語の影響はほとんどないとみてよい。

◇其頃、時のいうしよくと、世にのゝしられ給ふか、内のおほいと、四位の少將とかや (191a しのびね物語)

◇そのころ、ひやうふ卿のみやと、きこえさせ給ふは、とうたいの、二のみやにてそ、おはしける(339a 兵部卿物語) 一方、この「その頃」に類似するものとして、説話などでは「近頃」という冒頭語を用いる。たとえば、『発心集』では多くが「昔」「中頃」「近頃」という冒頭語を採る。この「近頃」を冒頭語とする作品が二本のみある。ともに古絵巻である。

◇近比の事にや、最心ほそくて、すくしける、尼きみありけり(304f 鼠草子)

◇ちかころの事にや、内大臣にて、左大将かけたる人、おはしけり(460b 稚児今参物語絵巻)

(5) 天皇

これは、語り始めに「○○帝の御時」などのように天皇の御代によって時を表すグループである。説話集で、それぞれの説話の語り始めに見られる。

◇後鳥羽院の御時、水無瀬殿に、夜々山より、傘ほどなる物の光りて、御堂へ飛び入ること侍りけり。(宇治拾遺物語・一五九)

◇嵯峨天皇御時、天下に大疫の間、死人道路に満たりけり。(古今著聞集・三八)

発端から直接内容に入っていく型であり、お伽草子では、時をはっきり限定することで、話に現実性を持たせようという狙いがあったかと思われる。天皇は平安時代の帝に多いが、神武天皇から萩原院(Ⅱ花園天皇)まで時代の範囲は広い。六分類の中で「公家物」と「武家物」に多い。なお、(1)でふれたが、「むかし」のような、他の冒頭語の直後に、「○○帝の御時」と続くものも少なくない。

◇せいわてんわうの御とき、三てうほり河に、中なこん殿ときこえさせ給ふ人、おはしけり(050a 岩屋の物語)

◇醍醐天皇之御宇、延長六年戊子八月之比、自奥州、見目能僧之浄衣着か、熊野参詣する、ありけり(295b 道成寺縁起)

◇しゆしやくるんの御時に。たわらのとうだひでさと、申て。なたかき、ゆうし侍り(264c 俵藤太物語)

◇仁王四十五代、聖武天皇之御宇、治廿五年ノ内、満福年ノ比天皇御歳六十ノ年崩御、東大寺御建立之初ヲ尋ハ
(244e 大佛之縁起)

なお、他の平安物語やその系統の物語には、天皇の御代で始める例は見られないが、『源氏』の「いづれの御時にかありけん」は、これに準ずる。お伽草子にも、類似するものが若干見え、「その他」に含めたが、(5)の「天皇」の類としてもよかった。源氏を意識したものかと思われる。^(注16)

◇いつれの御帝の、おゝん時にや、あふみの國、いかこ郡の司なる人に (34e 伊香物語)

◇いつれの御代にか、かしこきみかとに、つかへたてまつり給ふ、大納言ときとものきやうと申公卿、おはしける
(224b 硯わり)

(6)地名

時にふれることなく、「どこどこで」と語り始める型である。説話に見られる型である。

◇大和の国に、龍門といふ所に、聖ありけり (宇治拾遺物語・七)

◇津の国の渡辺と云ふ所に、長柄の別所と云ふ寺あり。(発心集・二ノ七)

どの分類にも見られるが、「宗教物」に多く、「日本我朝に」「天竺に」のように大きく場所を示す場合が目立つ。

◇我國、につほんに、観音のれいちち、おほくおはしませとも (078a おちくぼ)

◇須弥山ヨリ南ノ、閻浮提ニ、一ノ嶋アリ (041b 伊豆國奥野翁物語)

◇てんちくにくにあり (117b 熊野の本地の物語)

◇はりまのくに、あかしのさへものせう、しけたかと申人をはしけり (005c あかしの三郎)

◇たうせんだう、みちのくのすへ。しなのゝくに、十ぐんのその内に。つるまのこほり、あたらしのがうといふ所に。ふしぎの、をとこ一人、はんべりける (397d 物くさ太郎)

◇もろこしの、てんたい山に、かくれ里有けり (089e かくれ里)

◇極楽に、すてに、我もくと、物々具ぞろへして、兵具くらべ、はじまりけり (352f 佛鬼軍)

(7) さるほどに

七番目は「さるほどに」で始まる類である。『日葡辞書』によれば、「Sarufodoni」は「そうしていると、そうしているうちに、または、物事がこんな具合になったので。また、これは「Somosomo」と同じように、書物の冒頭に用いる語であって、それ(内容)が新奇のものでもなければ、初めて言い出す事柄でもないことを知らせて、控えめに書き起すのに用いる」とある。また、『ロドリゲス大文典』には「Sareba」「Tsuratcura」と共に「話の発端」を表し(301p)、「然に文段を始める場合に使ふ」とし、『Esopo』(伊曾保)の冒頭を例文として示している(455p)。また、「それ」や「そもそも」と同様「内典」で文首に用いる(662p)とある。

「武家物」に圧倒的に多い冒頭語で、特に語り物として享受された作品が目につく。が、注意したいのは『Esopo』の冒頭語にもなっているという点である。これが語り物であったということは当然ありえない。また、説話や物語で冒頭語として「さるほどに」を使うことはまずない。とすれば、『Esopo』の冒頭語はお伽草子のそれに影響を受けたものではまいか。同じくお伽草子に多く見え、話の発端を表す「それ」「そもそも」より口調のやわらかい「さるほどに」を選択したのではないか。『日葡』の記述に「控えめに書き起すのに用いる」とあるのは「そもそも」や「それ」と比較してのことと思われる。また、以下のお伽草子の例もすべて「語り」と関わるのではなく、「語り」と関わる作品に影響を受けたものもあると考える。

- ◇さるほどに、またたくの大わう、けいたんこくの、あるしとて、大わう、おはします (121b 熊野の本地)
- ◇さるほどに、一のたにの、かつせむ、やふれしかは (133c 小敦盛絵巻)
- ◇さる程に、しやうるり御せんの、ほんちを、くはしくたつぬるに (208c 浄瑠璃物語)
- ◇さるほどに、はうくわん殿は、七つの御とし、くらまの寺へ、のほらせたまいて (286c 天狗の内裏)
- ◇さるほどに、ほうてうの四郎ときまさは、きやうふのせうをちかつけて (413c 六代)

◇さるほとに、へいけの大しやう、きよもりとのは、しゆつけし給ひて、かいみやうを、しやうかいとこそ申ける
(300d 長良の草子)

◇さるほとに、あるかたやま里に、世にこさかしき、さるあり (069f えんがく)

(8) 人名

いきなり登場人物名からはじまる類である。説話にはよく見える型である。お伽草子の場合、和泉式部、源義経、平清盛など誰でも知っている有名人や神仏であることが多い。

◇安居院法印ときこえしは、入道少納言通憲か孫子なり (129a 源氏供養草子)

◇釈尊は今を始て、佛に成給へるかと思へ共 (195b 釈迦の本地)

◇源の御ざうし義経、牛若君と申せし時、くらまを、御出有て (085c 御曹司わたり)

その中で、「公家物」には次のように、物語で初めて知る人名を冒頭に持つてくる例が若干見られる。

◇さ大しん殿ときこゑし人、きんたち二人、おはしけり (183a しぐれ)

◇大納言にて、おはしましけるひと、内の御おほえも、いみしく (322a はにふの物語)

このような型は、鎌倉時代の擬古物語にも見え、これらの冒頭はその系統を引いたものと思われる。

◇この頃の左大臣ときこゆるは、関白殿の御おとうとにこそおはすれ、御身のざえなどもかしこく (石清水物語)

◇なにがしの中納言、其頃の有職にて時めき聞え給ひける。(白露)

(9) 年号

冒頭が年号で始まる類である。説話の冒頭によく見られる。天皇で時を示す場合と異なり、平安時代はなく、「大宝」もあるがあとはすべて中世以降の年号で、話に現実性を持たせるためと思われる。一方「異類物」に目立ち、こちらはパロディーとしての効果を狙ったものと思われる。

◇おうゑいのころの、ことなるに、おわりのくに、いはくらのさとに (055a うばかは)

◇永享十一年六月六日、心ち大事になり、そこへ、おちいるやうに、かなしく候を (273e 長宝寺よみかへりの草子)

◇嘉霊、二四のとし。癸丑のした。弥生上旬。摂州、大坂の川口におゐて。 (051f 魚太平記)

◇去ぬる魚鳥元年壬申、八月朔日。精進魚類の殿原は。御料之大番にぞ、参られける。 (206f 精進魚類物語)

◇せんさう元ねん、八月なかはの事なるに、むさし野のあたり、ちくさとの御うちに、わかくさたち、あつまりて
(336f 姫百合)

(10) なかむかし

十番目は「なかむかし」を冒頭語に持つ類である。説話や物語には見えない冒頭語である。『日葡辞書』によれば「Nacamukaxi」は「さほど多くは年数がたっていないこと、あるいは、大昔ではないこと」とある。(4)の「なかごろ」と同様、三谷栄一氏の指摘する通り、お伽草子の場合、特に平安時代を指している点に注意したい。^(注17)「なかむかし」と副詞的に続く例はなく、すべて「なかむかしのこと」として後に続く。

◇中むかしの事にや、あせちの大なこんとて、世におほえかしこく、いゑたかき人、おはしける (415a わかくさ)

◇なかむかしの、ことにやありなん、かわちのくにかたのゝへんに、さりぬへき人、一人まし／＼けるか、かすの
たからに、あきみちて、とほしきことも、まし□□す (311a 鉢かづき)

◇なかむかしのことにや、侍けん、さまで、上らふならぬ人の、さりとて、むけにいやしからぬ、しよ大夫はかり
の人あり (453a 新蔵人物語)

◇中むかしの事かとよ、いなにひやうぶの少、ゆきちかどのとて、ゆゝしき長じや、まします (190b しのばずが池物
語)

◇中むかしの事なるに、かゝのくに、かめわりのさかのふもとに、ふくろふといふ、とりあり (342f ふくろふ)

三、内容分類と冒頭語

次に、お伽草子の分類と冒頭語の関わりについて考えてみる。分類は、とりあえず公家物、宗教物、武家物、庶民物、外国物、異類物という市古分類を基準にするが、必要に応じて軍記物、本地物等の分類を用いることもある。六つの市古分類において、二に述べた十個の冒頭語がどのような割合であらわれるかをそれぞれ図で示す。

①公家物の冒頭語

「むかし」「なかごろ」「なかむかし」「天皇」による冒頭が目立ち、多く時の表現が冒頭に來ることがわかる。特に、「なかごろ」「なかむかし」が他の類に比べ目立つのは、時は平安である点を強調しようという意図とみてよい。一方「それ」「そもそも」のような畏まった口調の冒頭が他の類に比べて極端に少ない点も、この類の特色と言える。

②宗教物の冒頭語

「それ」「そもそも」による冒頭が目立つが「さるほど」に「は」が少ない。多く畏まった口調の表現が冒頭にくることがわかる。特に、本地物はその内容から「そもそも」をとることが多い。一方、「むかし」や「なかごろ」が冒頭にくることもあるが、時に関する表現による冒頭語をとることは多くはない。どちらかといえば「公家物」と相対する傾向を持つといえる。

③武家物の冒頭語

「それ」「そもそも」「さるほど」による冒頭が多い。特に「さるほど」の割合は目立ち、『十二段草子』や『天狗の内裏』の諸本、『みなづる』など判官物の冒頭語

お伽草子の冒頭語

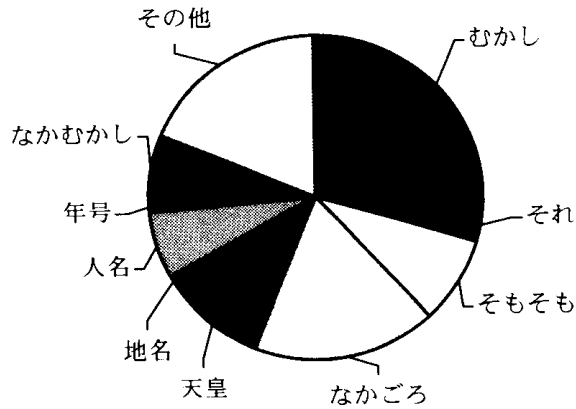


図 II-(1) 公家物

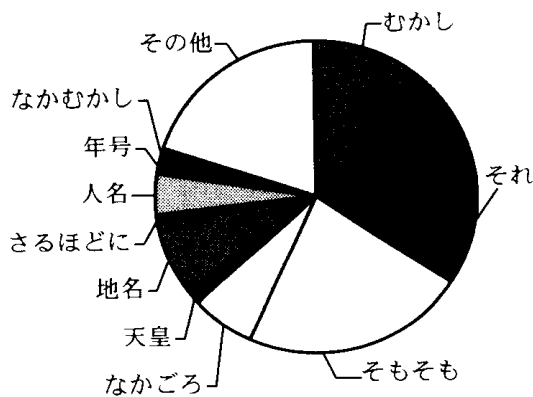


図 II-(2) 宗教物

としての特徴がある。「むかし」「なかごろ」など時の表現はあまり多くないが、「天皇」による冒頭語の割合が目立つ。『玉藻の草子』の諸本や『大江山酒吞童子』『俵藤太物語』といった怪物退治譚に多い。

④庶民物の冒頭語

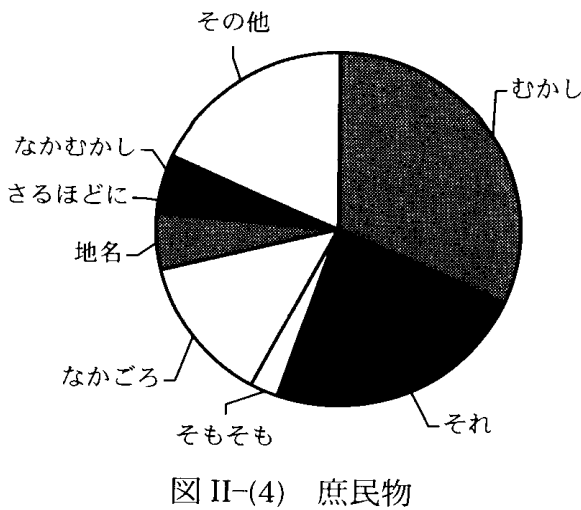
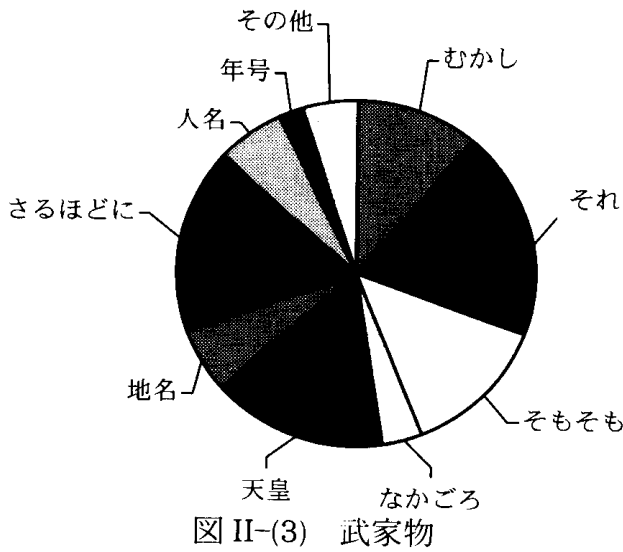
「むかし」「なかごろ」が多く「なかむかし」も見える点から、「公家物」に類似するが、大きな違いが二つある。一つは「天皇」を冒頭語にすることがない点である。「天皇」の御代にこだわりを示す「公家物」「武家物」と大きく異なる点である。歴史上の人物はほとんど見えず、無名の人物が主人公である点と関わりがあるか。また、もう一つは、「それ」による冒頭が目立つ点である。ただし、「それ」を冒頭に持つ作品は「鶴亀松竹」「七草の草子」「さざれ石」「若みどり」などの祝儀物に集中しており、その伝本も、時期は江戸期、形態も絵巻または奈良絵本という共通点がある。

⑤異国物の冒頭語

この類だけが、人物よりも舞台によるところの多い分類なので、比較する上で他の類と同様に論じてよいか疑問が残るが、「むかし」で始まる場合が多く、「そもそも」「それ」がこれにつぐ。

⑥異類物の冒頭語

ほとんどの冒頭語が大差なく見える点が、他の類と異なる。これは、異類物が、異類の公家物、異類の宗教物、異類の武家物ともいう作品がそれぞれ存在するためであろう。むしろ、この類の最も大きな特徴と言えるのは、「その他」が圧倒的に目立つ点であると言える。「その他」



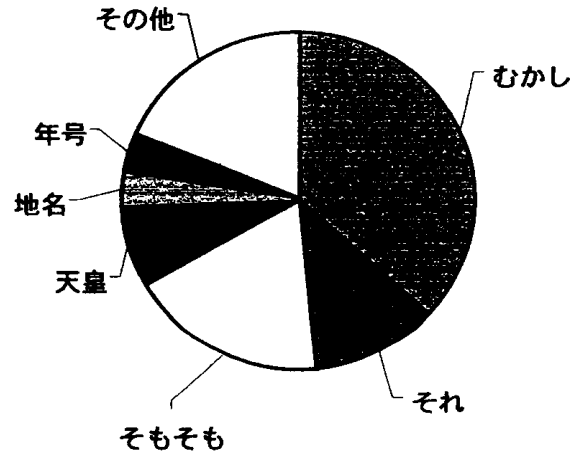


図 II-(5) 異国物

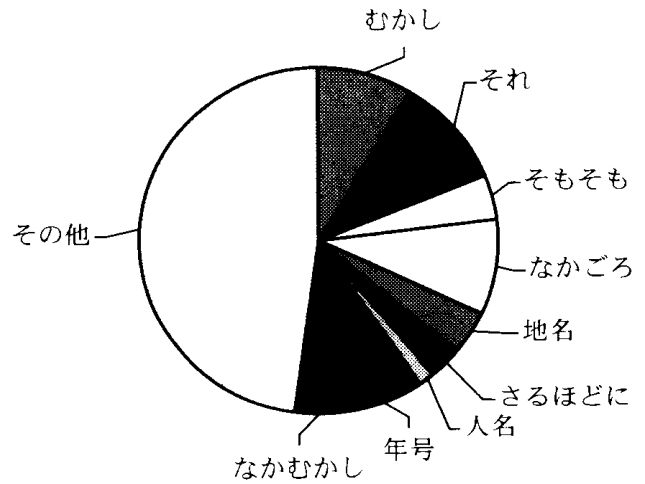


図 II-(6) 異類物

の例をいくつかあげてみるが、有名作品をパロディ化するものもあるが、技巧が見られ個性的で、他の類と作者の層が異なることを想像させる。

◇あきのなかはの事かとよ、一天はれて、くまもなし (124 鶏鼠物語)

◇あやしのいほの草枕、しばしこゝに、かり寐して、うき世の中を、つくくゝと、おもひつゝけて、日をおくりけるおりふし (147 ころぎ物語)

◇ころしも、三五の月の、ひかり、あまねく、千種にすたく、むしのこゑ、暮行秋

の、かなしみ、露も、なみたも、袖にあらそふ (256 玉虫のさうし)

◇つれくゝなるままに、日暮らしながら、とある野辺に出むかひて、心にうつり行、よしあし事を、そこはかとな

く、おもひ過す折節 (211 諸虫太平記)

◇とをく、むかしを、たつぬれは、中天ぢく、まかたこくの御あるし、じやうぼん大わうの皇子、しちだ太子と申すは、御とし、十九にして、出家し給ひ (139 強盗鬼神)

◇ひさかたの、天とひらけ。あらかねの、地とかたまりて。かはらぬ御代の、春ぞめてたきと。ことぶきいわふ、さかつきの、かげものどかに、めくる日の。(205 酒餅論)

◇一天四海、しつかにして、草木國土、万民ゆたかにて、鳥るいに、いたるまで、めてたきためにそ、申ける (402 弥兵衛鼠)

四、文頭語による分類の試み

さて、内容的分類との関連を述べてきたが、予想通り、冒頭語と内容による分類は大体において関わりがあることがわかった。しかし、一方で、それぞれの主流である型からはみ出るものが存在する。

ここで、再度十個の冒頭語について、以下の三つに分けて考え直してみたい。

I 「むかし」「なかごろ」「なかむかし」

II 「それ」「そもそも」「さるほどに」

III 「天皇」「地名」「人名」「年号」

I は「昔の話」として語るといふ姿勢が冒頭語に表れているグループである。

同じく「天皇」「年号」も過去の時を表す冒頭語ではあるが、具体的な時を示すことは表現意図が異なるものと考え、III に含める。

II は『ロドリゲス大文典』や『日葡辞書』が、話や書物の発端に用いると説明しているグループである。

III は前置きなしに、いきなり具体的な内容に入っていくグループである。

この中で、内容的には物語や説話にきわめて近いお伽草子が、前代の影響を受けず作り上げた独自の冒頭語はIIとみてよい。

このII型冒頭語はどのような意味を持つのか。逆説的な証明の仕方かもしれないが、最もこのII型を避ける傾向がはっきり見える「公家物」において、あえてII型を採る作品や伝本について考えてみたい。すなわち、「公家物」で「それ」や「そもそも」で始まるというような作品や伝本に着目してみることにする。

II型を取る作品とはどのようなものか。以下あげてみる。

冒頭語に「それ」を採るものは次の通り。

おちくば (437 寛文頃奈良絵本)・中将姫 (268 慶長前後絵巻)・花世の姫 (321 明暦頃刊本)

「そもそも」を採るものは次の通り。

いはや物語 (432 寛文頃絵巻)・小町双子 (152 天文十四年写本)・小町のさうし (153 寛永頃刊本)・西行の物かたり (161 江戸初期写本)・さざろも (447 寛文頃奈良絵本)・千じゅ女 (237 室町末写本)・千手御前物語 (238 近世初期奈良絵本)・中将姫本地 (269 慶安四年刊本)

同じ作品の伝本がいくつか見えるものを例に考えてみよう。「小町の草子」(152・153)と「千手女」(237・238)と「中将姫」(268・269)がある。

今これらの作品を論ずる十分な用意もないが、一つには内容的に「宗教物」への接近という点があげられるのではないか。「小町の草子」はその晩年に焦点をあてたもので、随所に仏教色が感じられ、小町も業平も観音の化身であったことを説く。「中将姫」は「中将姫本地」という名や別名「当麻寺縁起」からも想像できるよう、公家物の継子物に位置づけられるが、その中心はむしろ後半出家して曼荼羅を織りあげ、往生を遂げる点にある。「千手女」もまた継子物であるが、清水観音の利生譚という性格が濃厚である。

時代的傾向として、仏教色が強調されるのは、どの作品にも言えることであろうが、文頭をⅡ型に採ることによって、その作品の焦点が昔物語ではなく、宗教的教訓にあることを暗示しているのではなからうか。

そして、もう一つに「語り」の問題がある。松本隆信氏は「千手女」の「物語接待」という特異な趣向に着目し、この作品は本来「加賀国の人々を対象として語られた物語であった」と推定する。^(注18)「千じゅ女 (237 室町末写本)」は、装丁の上でも用語の上でもそれが感じられるという。Ⅱ型を多く採る「宗教物」や「武家物」は「語り」と関わる作品も多いことから考えても、冒頭語のみでなく、用語全体を検討することによって、Ⅱ型をとる「公家物」について、それぞれ検討してみる余地はあるかもしれない。

また、同じ作品でありながら、ある伝本(や同系統の伝本)のみⅡ型を採ることもある。「さざろも」を例に考えてみよう。松本隆信氏の「室町時代物語類簡明目録」^(注19)に基づき、今手元で見ることのできる伝本のみであるが、その冒頭を揚げてみる。

- A (一) 慶応・室町後期写本……………北野の天神の御とき
- (二) 加賀家旧・寛文頃奈良絵本……………そもそも
- B (一) 慶応・慶長2年写本……………むかし
- (二) 内閣・江戸前期写本……………むかし
- C 赤木・寛永絵入刊本……………むかし
- D 武田祐吉旧・奈良絵本……………なかごろ
- 国会・写本……………なかごろ
- E 穂久邇・室町末写本……………むかし

右の範囲では加賀家旧蔵本が「そもそも」をとる。^(注20)

◇そもそも、きたのゝてんしんの御とき、なひ大しんとの御こに、さころもの大しやうと、きこゆる人、おはしけり (447a さいろも)

同系統の慶応本に「そもそも」を付しただけの感があるが、慶応本とは後の本文がかなり異なる。特に慶応本は「されは、むかしより、いまに、目出度ためしには、さ衣の大しやうの御事をこそ、申ったへ侍りけれ」と物語を終るのだが、加賀本は、教訓めいた文章が延々と続く。実は、同じことがB系統の慶長二年本にも言える。共に大将も姫君も神仏の化身であったとするが、加賀本はかなり強く信仰の徳を説いている。次は巻末の文である。

◇されは、一系に、なさけふかく、心のやさしきゆへに、かくなんありけり、おとこおんなの、ならいは、たかきもいやしきも、たかひに、ふかくおもひあひて、すへまでも、なさけをしるならば、たれには、いかて、おとらまし (慶長本)

◇佛になるも、心からなり、さひけの身なりとも、たゝこゝろさしに、よるへし、ふつしんをしんし、おやのけふやうを、いとなむもの、かならず、すゑはんしやうして、こしやうも、めてたしと、ほとけ、ときおかせたまふなり (加賀本)

一部の伝本を見ての安易な結論は避けたいが、ここにも「そもそも」と宗教性のつながりを見ることができないのではないか。

今は説明を省略するが、先にあげた「岩屋」や「落窪」も、他の伝本が「昔」や「天皇」を冒頭語として採る中でのⅡ型であり、これらの伝本も宗教性が濃いように思われる。しかも、「さごろも」と同じく寛文頃の奈良絵本や絵巻である^(注21)という共通する形態や時期も気になるところである。

なお、「公家物」の場合「さるほどに」で始まる冒頭語はないが、「さるほどに」は二の(7)で述べたように『天狗内裏』や『十二段草子』の諸伝本の冒頭語である。これらの「語り」との関連はすでに指摘されているところである。

以上のことから、Ⅱ型は宗教色や語りと関連する冒頭語の類と考える。いわばきわめて中世的な冒頭語なのである。

五、まとめ

以上、多用される冒頭語を三つの類に分けてみたが、本稿では「その他」に含めた個性的な冒頭語（というより冒頭句といった方が適切か）を拾い出して、Ⅳ型とすべきかもしれない。また、Ⅲ型についても、他にありえないか再検討しなければならない。冒頭語による分類は完全なものではない。

しかしながら、以下の二つの型は、お伽草子の文章を読む上で意識されてもよいのではないか。

Ⅰ型：冒頭語が「むかし」に代表される型……むかし・なかごろ・なかむかし

Ⅱ型：冒頭語が「それ」に代表される型……それ・そもそも・さるほどに

Ⅰ型の作品は四五四作品のうち一三〇（今は昔「いにしへ」も含めれば一三九）本を占め、Ⅱ型は一四八本を占める。^(注22)これがすべてではないが、お伽草子の冒頭語は大きくⅠ型とⅡ型に分れるのである。

塚崎進氏は『古事記』の初頭形式（冒頭）ではあるが必ずしも「起筆」を意味するわけではない）が『平家物語』や『曾我物語』などのそれと類似している点に着目し『古事記』以下中世代の伝承文学における物語初頭の表現形式が、帝皇の日継風の体をなして、これが皇室から更には平家、源氏などの一門の歴史が、系図としてその時代の聴衆の支持をうし

なうことがなかったが故に、物語初頭に保存された」とする。^(注23)

そして、右のように物語の人物に関連した、祖先や祖神の系図から始める物語の初頭形式を系図系（氏は「実用の文学形式」とも呼ぶ）、昔の系図を完全に捨て「今は昔」や「昔」ではじまるものを物語系に分け、次のように述べる。^(注24)

「室町時代の物語をみた場合、系図系の物語がますます助長されている物語もあり、どしどし昔話系に推移してゆく物語もあるということである。しかしながら、その中におのずから分岐する脈絡はあって、物語の一部は崩壊して草子化してゆくのである。その一方において、一部の物語は固く系図を保持してゆく、それが面白いことには、語り物の性格をもっているものにこそ、その系図の精神が維持されているということである。この二つの物語の岐れ途にあたるのが中世の物語の特色ではないだろうか。」

二で述べたように、必ずしも「それ」「そもそも」「さるほどに」は、由来や系図と関わる冒頭語ではない。が、塚崎氏の指摘されるように、お伽草子には、冒頭語だけから見ても、内容的な分類とは次元を異にして、大きく二つの流れがあるように思うのである。そして、実は時に双方が絡み合いながら、近世小説につながる新しい流れが生まれてくるのではないか。このあたりは、次なる課題である。

注

(注1) 円地文子・鈴木一男『全講和泉式部日記 改訂版』（至文堂、昭58）「考説（二）」「（二）起筆と冒頭の違いについて」（鈴木一男氏執筆）以下の引用もこれによる。

(注2) 市古貞次『中世小説の研究』（東大出版会、昭31）市古氏は、この書で六分類を「公家小説」「僧侶（宗教）小説」「武家小説」「庶民小説」「異国小説」「異類小説」とするが、『岩波古典文学辞典』（「お伽草子」）等の解説では、「公家物」「宗教物」「武家物」「庶民物」「異国物」「異類物」としている。本稿でも、一般的なこちらの呼称を用いることにする。

(注3) 「公家物」をa、「宗教物」をb、「武家物」をc、「庶民物」をd、「異国物」をe、「異類物」をfと記す。内容的に複数にまたがる作品は、便宜上一つの分類に入れたが、なお迷う若干の作品（以下に示す）については、その他としてgと表

示する。「玉だすき」(251)は和漢の説話を集めたもの、「短冊の縁」(265)は東国の豪族の悲恋を描いたもの、「花子ものぐるひ」(316)、「百万ものがたり」(338)は謡曲の影響を受けた狂女物、「舟のいとく」(353)は和漢の舟の由来とその威徳をたたえたものである。この点については、後の注22でふれる。

(注4) 藤井貞和『物語文学成立史』(東京大学出版会、昭62)

(注5) 三谷栄一『物語文学史論』(有精堂、昭27)、同「物語の冒頭表現の推移とその方法——後期物語文学論序説(上)(下)」(『国学院雑誌』89-9・90-4)

(注6) 「昔話の発端と結び」『柳田國男全集・十三』所収(筑摩書房、平10)

「我々の昔話は、「昔々ある処に」といふ言葉を以て始まるのが、中世以後の習はしであつたかと思ふが、それがいつの間にか地方毎に、僅かづゝ言ひかへられようとして居る」とある。

(注7) 中野幸一『物語文学論攻』「古代物語の系譜——物語文学における「今は昔」の一考察」(教育出版センター、昭46)

(注8) 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』(東京大学出版会、昭38)

(注9) 山本真吾「自證房寛印の表白集について——十二世紀における表白集の編纂活動」(『鎌倉時代語研究』22)

山本氏によれば、江戸時代中期の書写ながら、奥書に自證房寛印の名が見え、勧修寺法務寛信とほぼ時期を同じうする十二世紀における真言宗教団の、新たな表白集編纂活動の実態が窺われるものという。

(注10) 塚崎進『物語の誕生』(岩崎美術社、昭44)

(注11) 「抑」に「そもそも」とルビがある場合が多いが、漢字表記の場合「そも」と読む可能性もある。但し、冒頭語としての仮名書きの「そも」はない。

(注12) 志村有弘『中世説話文学研究序説』(桜楓社、昭49)

(注13) 前掲注5参照

(注14) 前掲注5参照

(注15) 前掲注5、また、中村紳一「源氏物語、卷々の冒頭表現」(今井卓爾博士古稀記念論集編『物語・日記文学とその周辺』桜楓社、昭55)でも「その頃」についての記述がある。

(注16) 以下の二例は「御帝」「御時」とあるがために天皇の御代をおぼろげに表現していることがわかるが、単に「いつのころ」(鼠の草子、玉虫の物がたり、窓の教)とか「いづれるとき」(秋月物語)などとする場合もあるので、「天皇」には含めなかった。これらの意識としては、天皇の御代に対するこだわりというより、『源氏物語』冒頭に対する思い入れとみた方がよい。

(注17) 前掲注5

(注18) 松本隆信「千手女の草子について」(『文学・語学』28)、『中世庶民文学―物語草子のゆくへ』(汲古書院、平元)所収論文。なお、「千手女」には「むかし」で始まる江戸初期写本(236)もある。松本氏は、地方で伝えられた室町末写本(237)が都会に入ってきて「上流階級の間で書写された」のではないかとする。

(注19) 奈良絵本国際会議編『御伽草子の世界』(三省堂、昭57)所収。なお、この分類は、桑原博史氏によれば、冒頭起筆の時代設定「北野天神の御時」「昔桓武天皇の御時」「昔欽明天皇の御時」「中頃」「昔」によって五類に分けたという(岩波書店『日本古典文学大辞典』「狭衣」)。

(注20) 『室町時代物語大成』(補遺一)の解説によれば、国会に存する奈良絵本(上巻のみ)も、この加賀本と同系であるという。

(注21) 『岩屋』は寛永頃の刊本も同様で、流布本系が「そもそも」を採る。

(注22) 『大成』掲載の全作品を市古分類に沿って、分類していく上でどうしても悩む作品がいくつかあった(注3参照)。このうち、悲恋譚である「短冊の縁」はI型(なかごろ)、狂女物でも仏の功德が強調される「百万ものがたり」は、II型であり、宗教色を感じられる「舟のいとく」II型である。

(注23) 前掲注10参照。

(注24) 前掲注10参照。